

# ギリシア競技と芸術

阿 部 正 臣

## 序

ギリシア人を特徴づける努力の楽しみと競争に対する愛好は祭典競技を生みだし、そして競技会の増加と都市国家の対抗と共にギリシアはBC 6世紀に於て文字通りの競技国家となった。競技のわざを今日のものと比較する手段はないけれど、ギリシア人がBC 6世紀末やBC 5世紀初頭に行ったように非常に高い体力水準を得た国家はこれまでに類を見なかったと容易に主張できよう。そしてギリシアは芸術の国でありギリシアの芸術家は宗教的なものに劣らず競技者の美の中に強いインスピレーションを見い出していた。かくして、競技芸術が起り、やがては競技を洗練してBC 5世紀の彫刻の中に表現されているような高度の競技理想を築きあげた。

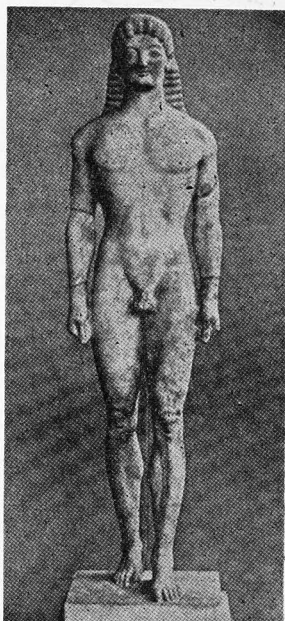
## 1 力 の 時 代

BC 6世紀は競技の組織化された時代で、その特徴は力である。体育 Gymnastics はすでに教育の本質的な部分であったけれど、まだトレーニングの技術は何も起っていない。そこで行われていたトレーニングはホメロスの戦士達のものとは少しも変わらない、単に伝統的なものにすぎず、その中にあらゆる階層の人達が参加していたという以外、スポーツはまだ大部分レクリエーション的なものであり、純粋にアマチュアであった。この時代の代表的な競技者はボクサーか、レスラーの強い者で、これらの運動が真のアマチュア精神の中に行われた時代である。それで競技が人気を持てば持つほど、戦闘の実践的訓練としての機能を大いに発揮した。クロトンのミロ、カリスタスのグラコウス、タソスのテアゲネスなどの名うての選手はボクサーか、レスラーであり、すべてBC 6世紀末からBC 5世紀初頭の人物である。実際に偉大なランナーについて耳にすることがあるが、余り名のあるものではない。競走競技が他の種目より優れた名誉を与えられたという一般的な概念は厳密に言うと誤りである。ヒロストラトスの言うように、古いジムナスト Gymnast<sup>(1)</sup>（競技指導者）の目的はただ単に力だけを生み出すことにあり、古い競技者達は健康的な生活を送り、自分の力を8オリンピックアド、あるいは9オリンピックアドさえも維持することができた。そのトレー

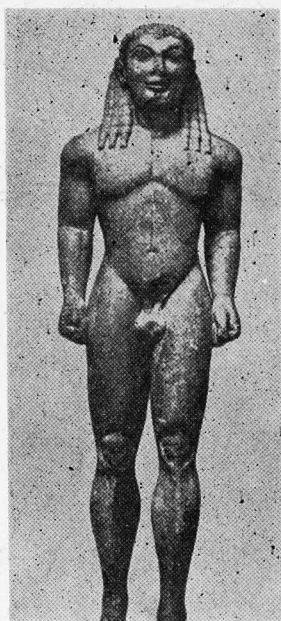
ニングは人為的に編み出されたものでなく、すべて自然になすがままで、注意深い食事、入念なマッサージ、練習方法と睡眠は後代になってから加えられたもので、まだ知られていない。当時のトレーナー達は彼ら自身が競技者であり、特にボクシングやレスリングの実際的な技を指導することに限られ、競技者は健康で活発な戸外生活に自分の力を尽す義務があった。これらの古い競技者について語られた物語がこの事実を良く説明している。グラウコス<sup>(2)</sup>は少年時代に鋤から抜けた刃を挙げて打ち込んで直したといわれ、テアゲネスは9才の頃、学校から家路につく途中、広場に立つ神像を高々と肩にかつぎ、これを家にかついで帰ったという<sup>(3)</sup>。またサムソンの功績を思い起させるような野獣との斗いの話がいくつかある。しかし、この時代の大部分の運動は重量物をあげることで、ミロは若い小牛を毎日毎日、完全に生長するまで持ちあげるとい<sup>(4)</sup>う最も科学的な原理に従って練習したといわれ、チトルムスはミロが動かすことのできなかった大石を15.6m持ち運んだ後、投げとばし、更に力を見せるために二頭の野牛を素早く追いかけてとらえたという<sup>(5)</sup>。ビボンは片手でもって143.5kgの砂塊を頭上越しに投げたというこのBC6世紀の記事にまつわる赤砂の塊がオリンピアで発見されている<sup>(6)</sup>。また「クリトブルスの子ヨウマストスは私を地上に軽々と持ち上げた」というBC6世紀の叙述に順じるような480kgもある砂塊がサウトリンで発掘されている<sup>(7)</sup>。

また水泳も人気のあった運動である。ナクソスの有名なボクサー・チサンドルス<sup>(8)</sup>は毎日水泳をするために海に出かけて体力を支えていたといわれ、ヒロストラトスは「古い競技者達は川で水浴し、裸で戸外に寝たり積みわらの中に寝たりして身体を鍛えた」ことを伝えている<sup>(9)</sup>。彼らはこうした生活を送ることにより、健全な食欲を持ち、酵母の入らないパンと粥などを主とした一般人の食べる食事<sup>(10)</sup>で生活し、食物に対しては特別な配慮を施していなかった。当然、強い者は大食家で、彼らの食災について盛んに書かれた物語が多い。寸鉄的短詩に従えば、ミロはオリンピアの神域に若い雄牛をつれてきて、それを一日で食べてしまったといわれる。ホメロス時代にも、恐らく毎日肉食をしていなかったと思われるけれど、同じような英雄の食欲家がいたにちがいない。しかし、これらの物語は強い者が大量に肉食して訓練した時代の作り事で、これがBC6世紀の食物ではない。この時代の競技者は病気におかされない健康体の持主であり、強い体力を持ち、長寿を誇り、日常生活の義務と軍役に対しても、競技は彼らを不向きにするということはなかった。彼らの多くは戦争に於て傑出した働きをし、ペルシア戦争に見られるように競技はギリシア民族に良い結果をもたらしていたといえよう。

芸術作品の中にも、この時代の顕著な特徴として力が見い出されている。これは良くクローロスKouros(青年)という漠然とした言葉で述べられ、全ギリシアに広く分布し、一般にアポロンの名の下に分類されている初期の裸体像に見受けられる。それらは神を表わしているにせよ、人間を表現しているにせよ、競技的な性格が投影していることには間違いない。高くてやせ型のテネアのアポロン(第1図)にしても、短く



第1図 テネアのアポロン  
コリントの近くテネアで発見  
された  
BC550年頃の作品  
ミュヘン古代彫刻陳列館



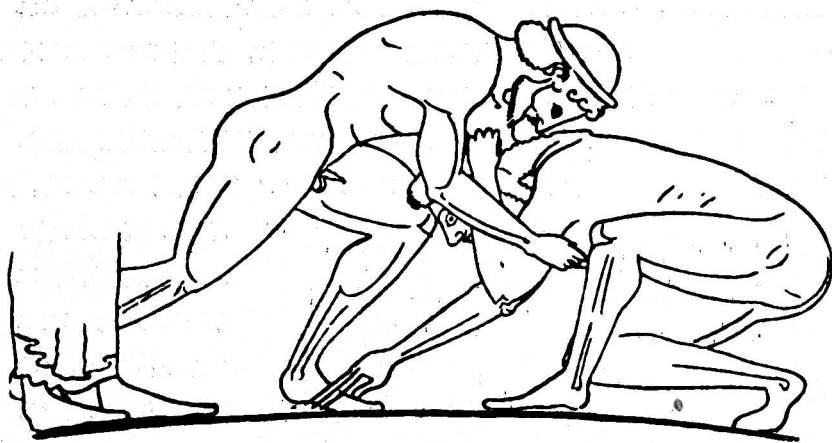
第2図 クレオビスまたはビトンの大理石像 BC600年頃 アルゴスのポリュメデスの作 姿勢はエジプトの模倣であるが、身体の型の研究に於て全くギリシア的である デルファイ美術館

どっしりとした型のクレオビス像(第2図)にしてもそれらのすべてに於て身体の筋肉を写實的に表現しようとしていることに気付く。実際に力が横たわっているところは支肢というよりも、むしろ胴の筋肉の中にあり、これらの筋肉は初期に於ける他の作品を区別し、特にペロポネソスの彫刻を特徴づけている。BC6世紀の代表的な像はひげのあるヘラクレス像(第3, 4, 5図)である。これは後代になって出て来る

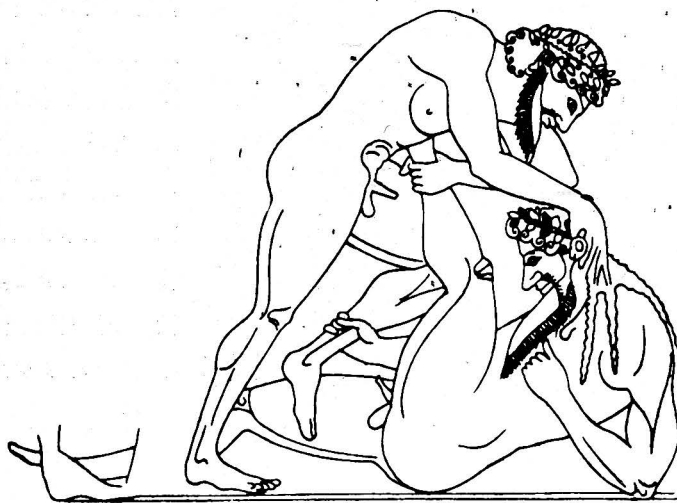
ぎこちない巨人ではなく、持久力と力の典型であり、ピンダロスが語るように短い像であるが、耐久力と力が人格化されている。

## 2 競技美の時代

BC5世紀の芸術作品、特に壺絵の中に最も著しい変化が見受けられる。BC6世紀の壺に於て共通に表現されている典型的な競技者は十分に発達した人間で、それらは常にひげをつけ、普通の型の像であるとはいえ、力強い体格をし、描写は特にボクシングやレスリング(第6図)などの実際の試合場面を描き出している。しかし、BC5世紀初頭の赤絵壺の特徴は競技青年を象徴したもので、力強く、しかも美的な発達と優雅さを描写している。その描写は競技場の試合場面ではなく、体育場 Palestra



第3図 ヘラクレスとアンタエウス, BC 6世紀黒絵壺 英国博物館。



第4図 ヘラクレスとアンタエウス BC 6世紀黒絵壺 ミュヘン古代彫刻陳列館。

や運動場 Gymnasion の光景を描いたもので、特に五種競技、円盤投、槍投、跳躍などの各スポーツが描かれている。赤絵壺を作った画家達の英雄はヘラクレスではなく、体育場 Paleastra の芸術作品として常に現わされる青年レスラー・テセウス（第7, 8, 9図）である。もし力が BC 6世紀の基調であるとするれば、BC 5世紀は特に十分成長した青年と成人の年齢層に属する力と美の結合である。その変化は少なくとも都市生活の成長、それに伴う体育場 Paleastra の重要性の増大、組織化されたエフボイ訓練などに部分的に帰すると考えられる。多くの都市国家に於て16才から18才までの青年は軍団・兵籍に入れられ、厳格な競技的な軍事訓練と教練を二年間にわたっ

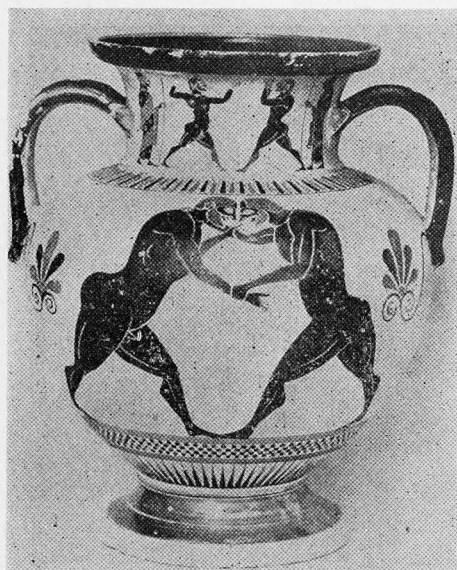




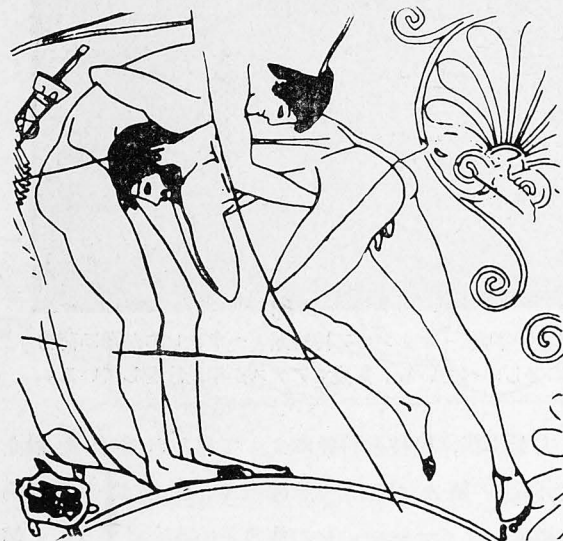
第5図 ヘラクレスとアタラスBC460年頃 オリンピア博物館 ヘラクレスが肩に荷物をかつぎ、アタラスがリンゴを彼にさしのべている。背後でアテスが手助けをしている。

て課せられ、武器と乗馬の施し方を学び、競技と狩猟によって自から身体を鍛え、都市国境の巡視を努めて実践的な体験を積んだ。この訓練の多くは公共の運動場 Gymnasion で行われた。そこは単にレクリエーションの施設というだけでなく、競技場でもあり、しばしば都市郊外の川岸の木立の中に建られ、そこで専門的なトレーナーの下に彼らは馬に乗り、駆まわり、相撲を取り、あらゆる型の運動を行った。老若をとわず、男達はスポーツに結ばれ、あらゆる競技試合を観戦することができ、そのために体育場 Palestra は各都市の日常生活に重要な役割を演じている。

ギリシア競技と芸術の密接な結合は運動場 Gymnasion によるもので、それはギリシア競技なくして、彫刻家は考えられないとまでよく言われてきたが、とりわけ、運



(第6図の1) BC 6世紀の末のアテツカ黒絵壺 英国博物館 (6図の2)



第7図 テセウスとケルキヨン BC 480年頃のアテツカ赤絵壺

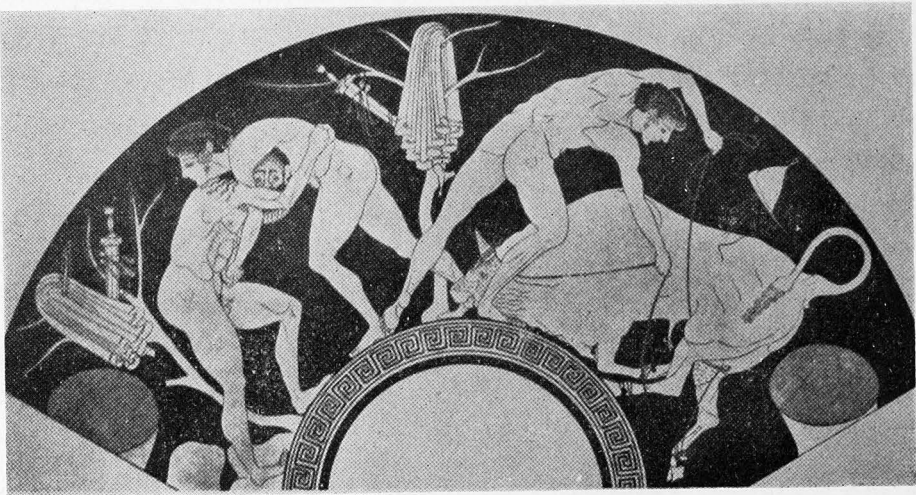
動場Gymnasion はギリシア彫刻家のスタジオであった。そこでは毎日、彫刻家達はあらゆる型のスポーツに従事している少年や大人達を観察することができたし、輝かしい美の主体となる裸体人間に関する認識を彫刻家達は完全に我がものにすることができた。

ギリシア人にとって試合にせよ、練習にせよ、運動場 Gymnasion (裸体で運動するの意味)

という言葉が意味するように裸体でした。腰巻さえ、BC 6世紀の壺絵にはめったに見られない。ギリシア人にとって裸体を見られて恥じることは異国人の印で、この裸体の習慣がギリシアの彫刻家に好機会を与え、競技に与えた影響は少なくない。日光浴は単に日光に当るというだけでなく、今日の医者が言うように極めて身体のために良いが、ギリシアの青年にとっては良いコンデションを保持する上に価値ある要因として役立っていた。身体の美

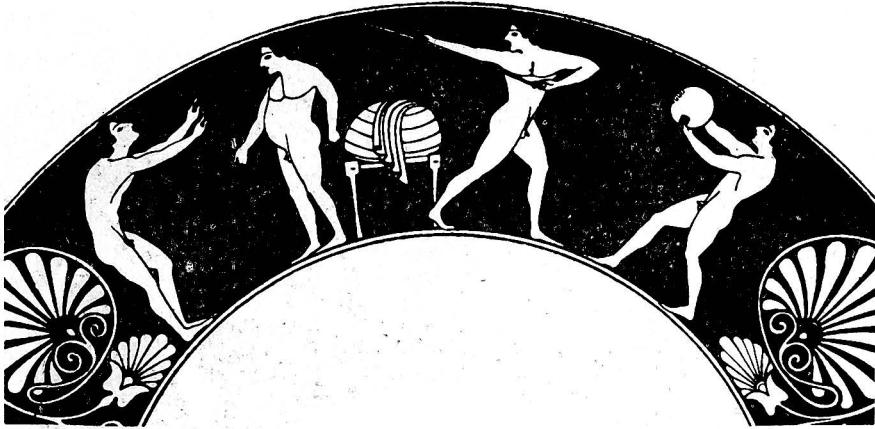


第8図 テセウスとケルキヨン BC 6世紀末のアテツカ赤絵壺



第9図 テセウスとケルキヨン BC 500～490年のアテツカ赤絵壺

に鋭い目を持ったギリシア人は筋肉が弛んでいたり、青白かったり、不健全な状態であつたりした場合、寵遇を失つた不完全な発達であると軽蔑し、病弱に育つた青年は仲間の笑草であつた。これに関しては英国博物館所蔵の壺絵（第10図）にはっきりと説明されている。中央の床几に衣が置いてあり、男らしい美質を備えた右の二人の青年は円盤と槍の練習をしている。病的に発達した左の二青年の一方はやせ細つており、他方はビヤダルのように肥え、この二人の青年は激しく口論をしている。画家はこの二つを上手に諷刺化している。

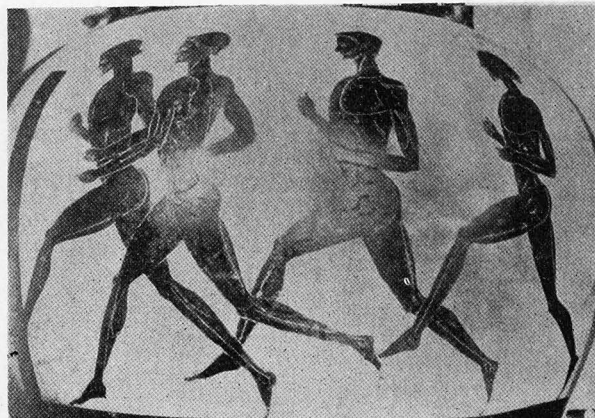


第10図 パレストラの光景 BC520年頃のアテツカ赤絵壺, 英国博物館

### 3 初期の競技像

競技と彫刻の間には密接な関係がある。BC6世紀中期の初頭にしばしば故国に等身大の像を献納することによって後継者達の記念にするため大きな祭典競技で優勝した者が像を立てるという習慣が起った。特にオリンピアなどの民族的な聖所に於てその習慣が如何にして起ったかについて確かなことは言えないが、恐らくその習慣は優勝者のために小さな奉納像を献じる古い習慣から起ったものと考えられる。オリンピアでは何千という奉納物の中で模型の銅戦車と御者、乗馬像、戦士像などが競技会に優勝した者の感謝のための奉納物になっていた。これらの優勝者像の中で最も古いものはBC544年のボクシングに優勝したアエギナのブラキシダナスのものと、8年後のパンクラチオンに優勝したオポウスのペキピウスのものであるが、パウサニアが語るところによると、BC564年、相手の乗身技で殺されたけれど、優勝の冠を受けた有名なパンクラチオンの選手・アナキオン<sup>(11)</sup>を記念してオリンピアとヒグレカに像が立てられたということが記録されている。賞として競技会の模様を描いたパンアテナの壺が最初のものであるが、この時代に現われている。この時代から競技像が絶えず必要となり、アルゴスやシキオンに競技的な彫刻学校が生まれ、ギリシア芸術の全面的な発達に大きな影響を与えた。オリンピアだけでも、競技像は何百という数を算えるが、それらはほとんど断片的にしか残存していない。各地で発掘された像の大部分が銅像であるが、完全なものとして発掘された唯一の優勝者像はデルフィからのものである。それを特別な競技者と一致させるということも考えられるけれど、大理石の模刻から知るところによると、これらの像は概して人物描写像ではないようである。

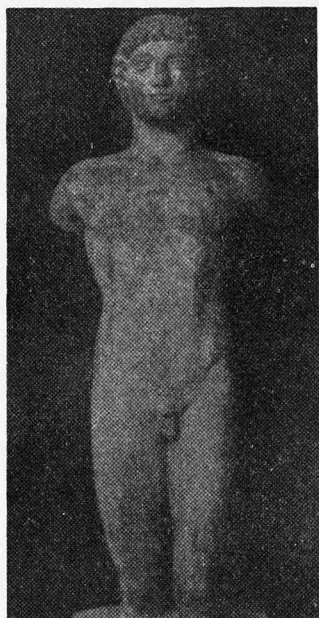




第11図 長距離走 BC470年頃の黒絵壺

代になって受け入れられたものと考えられる。BC 6世紀に力が突傑した動機となっているが、彫刻家は色々な型の競技者を表わそうとしているため、注目すべき変化が身体の形に現われている。広い横腹と筋肉的な足、長くて細そりした支肢を備えたテネアのアポロン(第1図)はちょうどパンアテナの壺に描かれている長距離走者(第11図)を見ているようである。逆にデルフィから発掘された初期のアルギベ像二体(第2図)は

プリニウスは3回優勝した者だけが人物描写像によって後継者達に賞讃されることが許されたというが、すでに述べたように最初の競技者像はクローズ Kourous型のものでなければならず、BC 4世紀以前の人物描写像はほとんど知られていないから、この見解は後



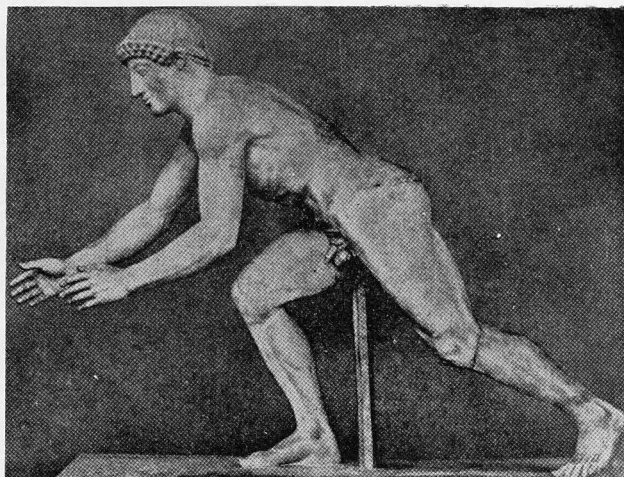
第12図 クーロス(青年)の大理石像 一般にストラングフォードのアポロンとして知られる BC 490年頃の作品、英国博物館



第13図 コイセウル=ゴツフィエルのアポロン BC 470年頃の銅像でローマ時代の模刻、英国博物館

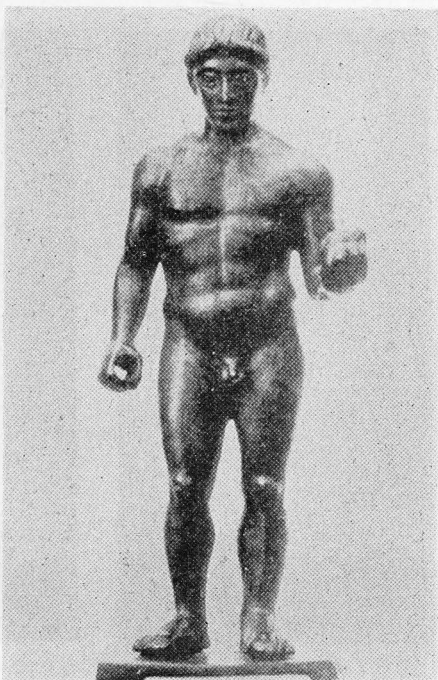
厚くて重々しい型をし、力強い支肢とどっしりした頭を持ち、明らかに強い人間を表現している。またボェオテアから出土したストラングフォードのアポロン(第12図)のように中間的な型のものも多くある。この型の多種多様性はギリシア芸術がギリシア競技と共に広がったのであるから、様々な体型がギリシア各地を支配していたと結

論づけられるであろう。  
ピアズレイ教授の言葉を  
引用すれば、このアカエ  
ア芸術の中に身体の体系  
的比率と愛の研究が見い  
出されるという。この説  
明はBC 5世紀初頭に於  
て非常に変化し、高度な  
発達をとげた芸術の中に  
型の多種多様性が存続さ  
れていたことを確信させ  
てくれる。極端なもの

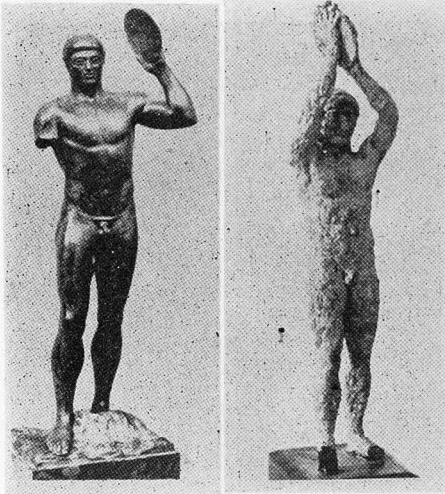


第14図 アエギナのアパイア神殿東破風の像 BC 490~480  
年、ミュヘン古代彫刻陳列館

してあげられるコイセウル=ゴウフィエルのアポロン(第13図)は肩巾が広く、力強い胸と背を持ち、高くて大男である。少々類似したものにはBC 486年にたてられた僭主ハルモデウスとアリストゲイトンの像がある。やはり、背丈が高く、長い支肢をしている。恐らくこれはアテッカ型として認めることができるだろう。一方、アエギナ人によって作られたギリシア式柱廊玄関にある破風の戦士(第14図)はやせ細って筋張っている。これらの中にはオリンピアのゼウス神殿から発見されたラピタイ像(第23図)とアルゴリスのリグリオで見つけ出された少々がっちりした銅の小像(第15図)がある。しかしギリシア芸術はギリシア競技のように理想へ向うことを根底としている。BC 5世紀後半のこの多種多様性はポリクレイトスとフィデアスの影響によって部分的に消滅する傾向を持つが、この身体的な形の多様性からどうしても競技者を分類することが困難である。事実、競技の専門化が生れ始め、BC 5



第15図 競技者像(リグリオ像) BC 5世紀中期、重々しい顎と厚くて頑丈な姿はアルゴリス学派の典型である



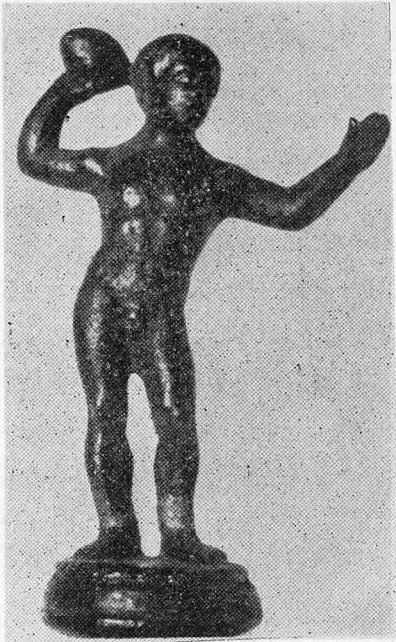
第16図 (1) (2)

ペロポネソスで発見された銅像(1) BC 480  
~470年 ニューヨークメトロポリタン美術  
館 ボエオチアで発見された銅像(2) BC  
480年頃、アテネ国立美術館

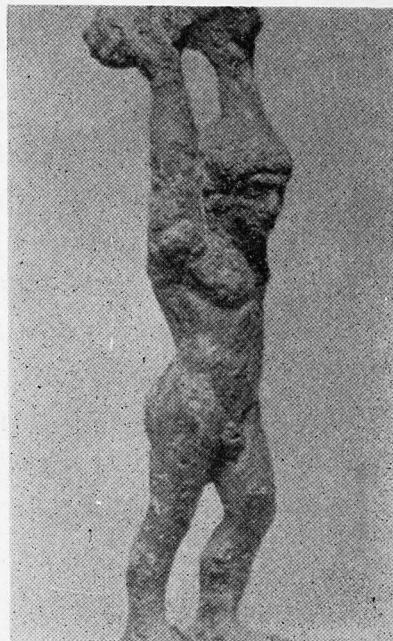
果、走者は別として力が本質となる種目の  
競技者を区別して表わすことは困難であ  
る。従って、初期の彫刻家達は何の種目に  
優勝したかを示すために手に円盤を持た  
せ、五種競技者(第16, 17, 18図)に跳躍  
重りを持たせ、ボクサーに皮紐を付けさ  
せているのであろう。後代になると、円盤や  
跳躍重りを持っている五種競技の選手や仮  
想の相手とスパーリングをしているボクサ  
ーなど、ある代表的なポジションで競技者  
を表わしている。

#### 4 ミロンとポリクレイトス

承知のようにミロンの円盤投選手像は競  
技者像の中で最も有名なものである。ミロンは偉大なるポリクレイトスと同時代のB  
C 5世紀中期の人物である。模刻によって知ることのできる彼の二つの作品は優勝を



第17図 石をかかえた競技者 5世紀後半  
のエトルリアの銅像 ボログナ美術館

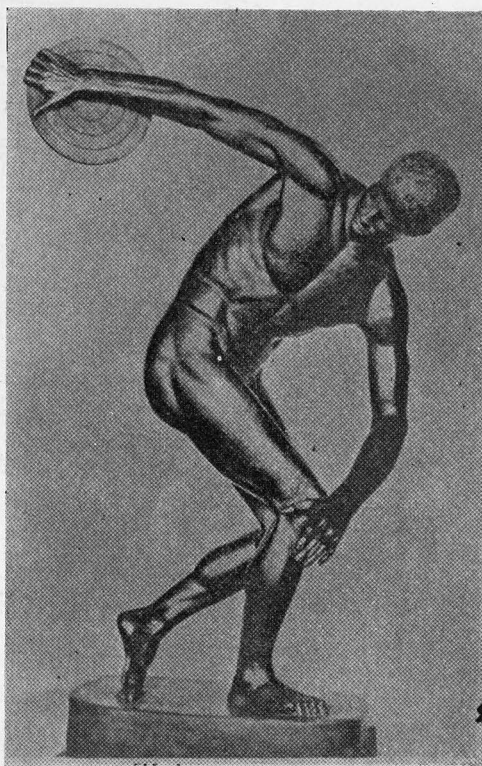


第18図 ハルテレスを振る跳躍選手 BC  
5世紀中期の作品、エトルリア人の作品  
ピラ=ギウリア美術館



誉えて作られた銅像でなく、この時代の芸術家達が意識的に理想を作り出していることをはっきりと証明する競技様式の試作であるから特に興味深い。

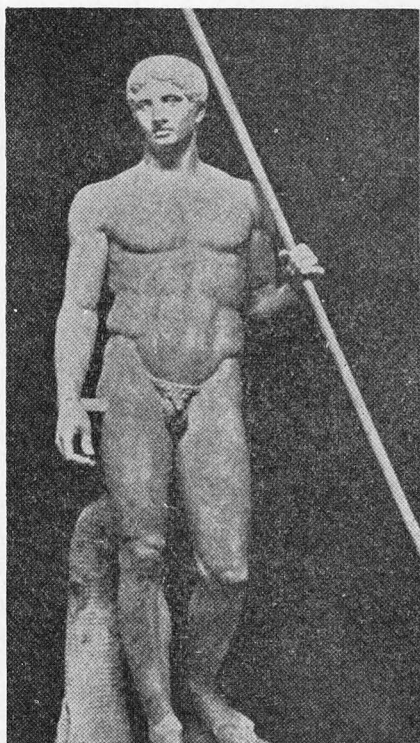
BC 480年と445年の間に活躍したミロンは特に運動している競技者の研究に努め、運動の瞬間の表現で最も成功している。円盤を投げる人Diskobolos(第19図)に於ては激しい一瞬をとらえながらも、結果は静止した状態の描写となり、銅で正しく固定できる唯一の動作を選んでいる。後方のスイングの頂点で安定性を示す瞬間のポーズを良くとらえ、しかも身体をねじったポーズとロープのように張った右腕は次に来るより強い運動を進めるための動作を上手に描写している。ミロンの作で他の有名な作品は勝利の期待に答えてゴールに全力で邁進する姿をとらえた



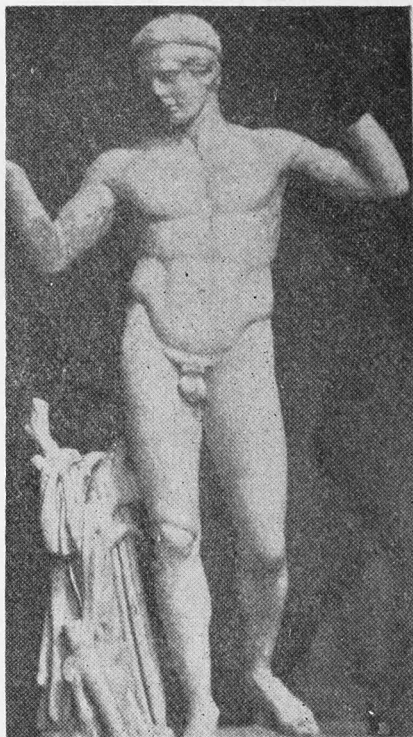
第19図 ミロンの円盤を投げる人 BC 450頃の銅像(模刻)ローマのテルメ美術館の胴体とランケロッツィ、コレクションの頭を結合させて铸造

走者ラダスの像である。全力で走る走者を銅におさめることは非常に難しいことであるが、彼はこの難題をみごとに解決している。

ミロンより2、3才若かったポリクレイトスはアルゴスの彫刻学派で最も名を馳せていたといわれ、最も良く知られている彼の作品——槍を持つ人 Doryphoros と勝利のリボンを結ぶ青年 Diadoumenos は競技様式の円盤を投げる人 Diskobolos と似ているが、動作の研究より比率の研究がなされている。槍を持つ人 Doryphoros と勝利のリボンを結ぶ青年 Diadoumenos の二つの作品(第20図の1, 2)は立ったポーズであるが、新しく足の構えを加えることによって体重を片足にかけ、地面に軽く着く程度まで他方の足を後方に引いて、これによってポリクレイトスは以前に知られていなかった生命とリズムを立体的なポーズに与えようと試みている。実際、槍を持つ人 Doryphoros はちょうど前に動こうとしているポイントをとらえ、そこには行動のあらゆる可能性があり、内在する豊かな生命とエネルギーがある。この像の中にポリクレイトスは身体の比例説を具現化し、それをカノン Cannon (規範) と呼び、その比例を



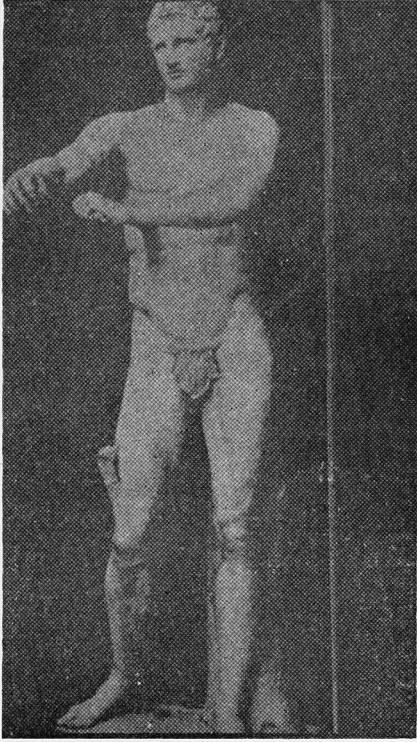
第20図の1 槍を持つ人, ポリクレイトス作  
(ローマ時代模刻) ナポリ国立美術館



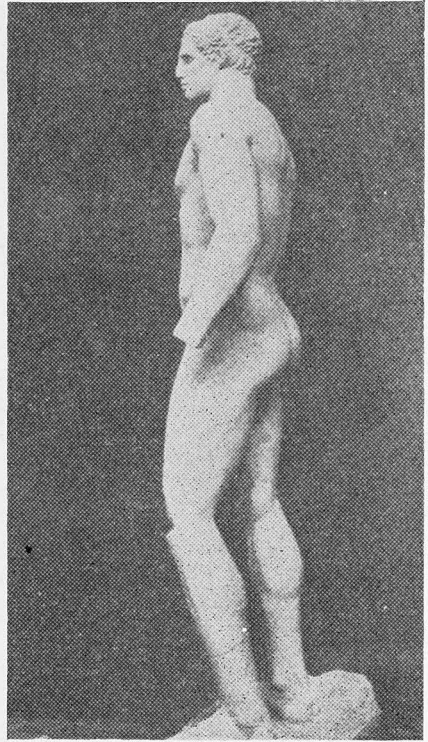
第20図の2 勝利のリボンを結ぶ青年 ポリ  
クレイトス作 (ローマ時代模刻) アテネ国立  
美術館

説明する小冊を書いている。槍を持つ人 Doryphoros は中位の高さ、四角の組形、立体的構造で立派に発達した支肢と胴体を備え、少しの誇張もなく、また過度な発達をしていない。頭はおもながであるが、姿勢によくマッチした力強い顎を持ち、像が生きみだす印象は力と量、位置の測定があり、競技にも戦争にも等しく適合する型である。彼は職業選手でもなければ、選手権者でもなく、競技に於てほとんどの者が備えるものを持った万能の競技者で、どんな試合に出場したとしても勝つことは疑いないと感じられるであろう。勝利のリボンを結ぶ青年 Diadoumenos は勝利のリボンを頭になびかせている少々年のいった青年を現わしている。その姿は非常に優雅であり、斗いの後の疲れをわずかに示し、そのフォームはまる味を持ち、柔らかいが二つの像のプロポーションはよく似ている。

BC 4 世紀リシポスによって作られた汗を掻き取る人 Apoxyomenos (第21図) とポリクレイトスのカノンと比較すると面白い。ポリクレイトスの後継者として彼は新しいカノンをこの像に作ったが、ポリクレイトスの像の頭部が全長の  $1/7$  になるの



第21図の1 汗を掻き取る人, リシボス作  
(ローマ時代模刻)



第21図の2 アギアス像, リシボス作(?)  
デルファイ美術館

に対し、これは1/8になっている。同様な競技者の像でありながらこれは遙かに雄渾な状態にあり、その姿勢には新しい非衰感がこもっておる。頭が小さく、身体が徐々に細っそりとし、支肢がだんだん長くなって、オールランドの競技者というよりも走者や跳躍選手を暗示しているかのようなのである。両手の位置や右肩と左肩の高さが同一でないことが全体に不安定な感じを与え、右足、左腰、胴、右腕、それから頭へとらせん形の動きを見せるが、その神経質な動きと疲れをもった不安げな眼の表現は名誉ある勝利の座に上りながらも没落の日を予期している悲劇的な神経質な競技者を思い起させるようである。

## 5 芸術に於ける競技の理想

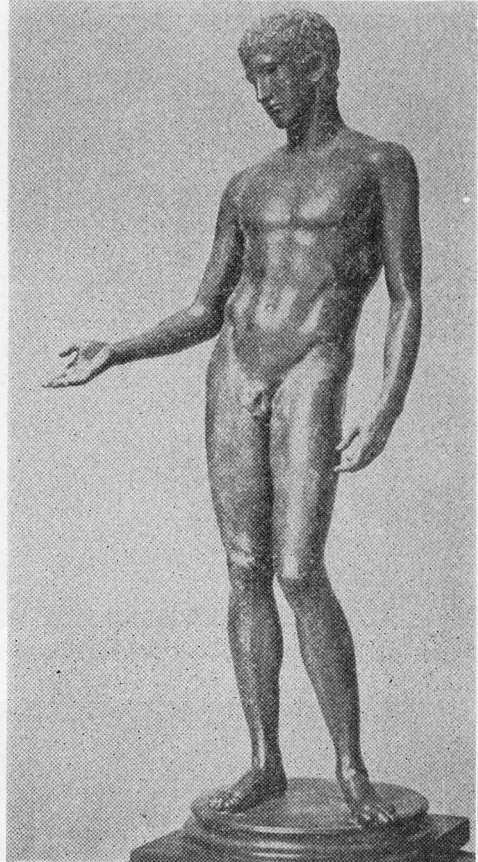
理想を追い求めんとする努力への成果はBC 5世紀後半の単調な型の増大に見られる。その理想はそれ自身に於て力であるか、美であるか、両極端に分けることはできない。競技のトレーニングは組織的な発達をとげ、彫刻家達に身体の評価を教え、線



の美とプロポーションを表現しない芸術は価値の対称にならないという芸術感を持たせた。それ故、この時代の芸術を特徴づけるものは力と美の結合である。

力と美の結合は特に十分発達した青年と開放的人間性の時代のもので、それはペリクレス時代の芸術を支配した若々しい力と美の理想であった。イドリーノとして知られるフローレンスの青年競技者の銅像(第22図)はこの時代の独創的な作品であろう。競技的な経験がBC 5世紀のギリシア彫刻に如何に侵透していたかを具体化するならば、大神殿の彫刻に目を点じなければならない。斗争にあらゆる神経を緊張させているオリンピアのゼウス神殿破風の青年ラピタイ(第23図)と休息して完全に力をとった例としてのパルテノンのテセウス像(第24図)はギリシア人の烈しい動きと休息を技術によって人体に現わそうとしたものである。

競技と芸術の間の密接な関係は競技に強い影響を与えたが、恐らくギリシア競技の著しい特徴とした運動のリズムとスタイルの重要性は競技と芸術の

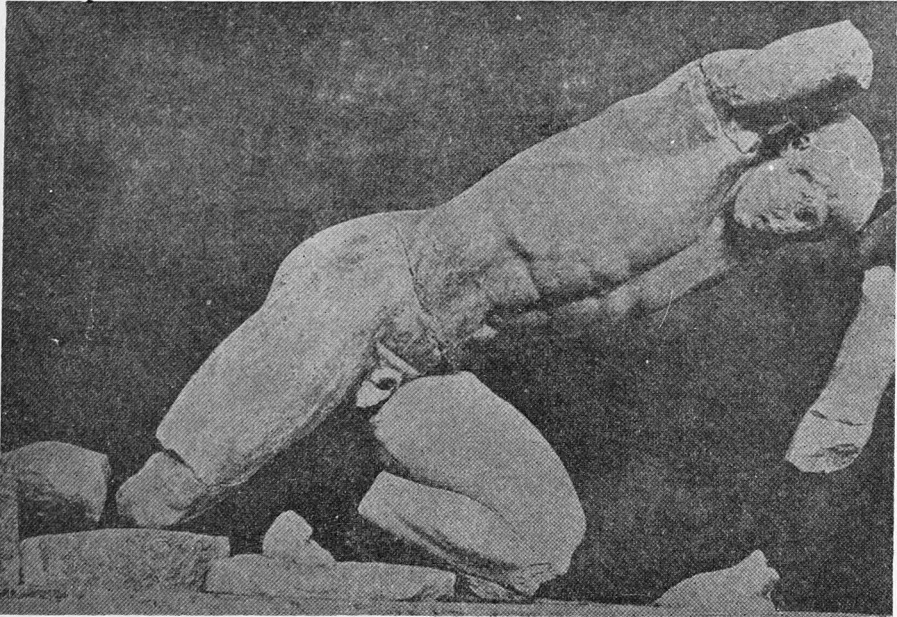


第22図 イドリーノとして一般に知られている少年優勝者の像。これは神盃を手に持つ少年優勝者を表わし、BC 5世紀後半に人気のあつた競技者、フィレンツェ考古学博物館。

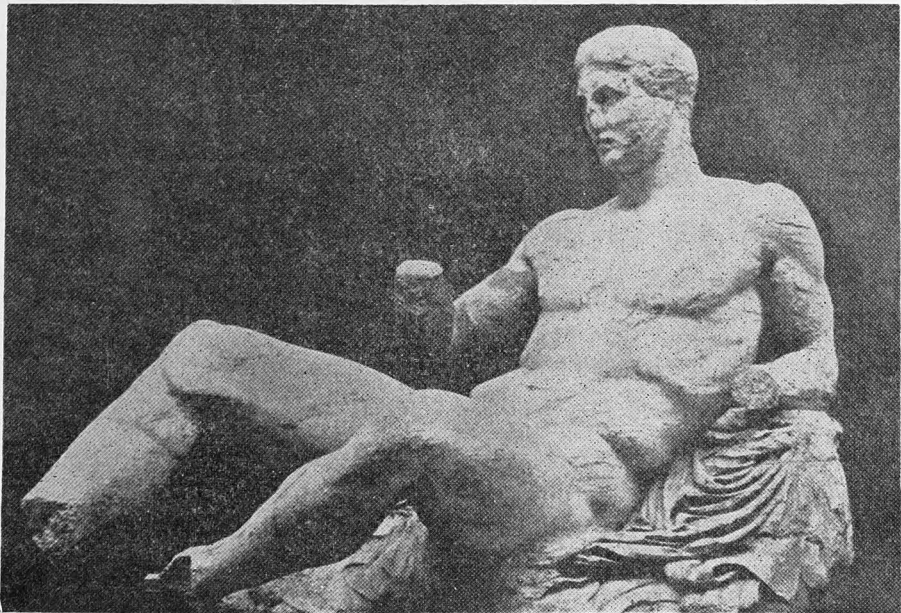
関係に帰されるであろう。この時代の壺絵はすべて誇張されずに完全な調和を計っているのが最も印象的で、美は柔軽さを誇張せず、無やみに力んでいない。音楽と体育が手に手を取って営まれた教育を告げるが如く、運動と動作の中に優雅な落ち着きがある。音楽の影響は特に勝利のリボンを結ぶ青年 Diadoumenos の律動的なポーズと動作に示されているが、これらの調和的なフォームは単に美の深さというよりも感情の深さを生みだし、その中に魂の表現が見られる。頭も身体と完全に調和がとれ、健康的な頭を持った活発な青年が歓喜に充ちて心身のあらゆる活動に従事しているかのようである。それらの表現には落ち着きと威厳があり、しかも誇りと傲慢さがなく、頭に勝利のリボンを結びつけているが、下を見落す視線の中には慎しみ深さと貞淑さを

## ギリシア競技と芸術

備えている。この威厳と謙譲の結合はピンダロスの競技理想の基調をなし、いわゆるアイドース Aidos とギリシア人に呼ばれるものである。



第23図 オリンピアのゼウス神殿破風のラビタイ人，BC 470年頃 オリンピア博物館



第24図 パルテノン破風のテセウス像 BC 438～433年 英国博物館

## 6 ピンダロスの競技理想

競技的芸術の精神は単に表現のみに左右されないとピンダロスは述べているが、これはBC 5世紀の競技と競技的成功にまつわる途方もない重要性及び奇妙な習慣を前提としている。競技の優勝を記念するために大彫刻家達が作品を作ったというだけでなく、偉大な叙事詩人達もまた優勝者を歓迎する祝賀パレードに於て少年コーラス隊によって歌われる勝利讃歌で優勝への賞讃を送った。勝利を大いに喜び楽しむ同僚達は優勝への感謝を表わすために神や英雄に誓をする祭壇に群った。勝利讃歌 *Epinikia* の最初の著者はBC 6世紀末に活躍したシモニデスであるが、詩の断片がごくわずかしかな存在していない。彼の甥に当るバキリデスについては彼の詩の13編の一部がエジプトのパピルス文書で発見されるまでほとんど知られていなかった。競技家生れのバキリデスは競技会の詳細を喜んで長々と論じているが、競技の精神に関しては何も語っていない。そのため、バキリデスと同時代に活躍した偉大な叙情詩人ピンダロスにどうしても頼らなければならない。彼は勝利讃歌 *Epinikia* の最後の作者である。競技像を奉納する習慣はローマ時代にさえ存在していたが、BC 5世紀後の勝利讃歌は耳にすることがない。ピンダロスの最初の詩はBC 5世紀初頭（444年が最後）に書かれたが、大部分はギリシアの凱旋に続く、爆発に熱狂したペルシア戦争後に作られたものである。ピンダロスはテーベ人で、貴族出身であったが、彼自身が語るように理想は金ずくで働き、利己主義的な動機はなくとも、競争と名誉愛のために戦車競走などの競技に出場した王子や良家の青年のように金を彼に支払うことができる人達のために書いていた。

真の競技者の資格は青年ボクサー・アゲシデムスを誉えたピンダロスのオリンピック讃歌12に要約されている。「素晴らしい才能を持って生まれたものであれば、神の恵みを受けて持ち前の刃を鋭し、神は有力な光栄を彼に授けるだろう。労苦なしに如何なる勝利も得られない。」

「農夫、獵人、漁夫達は激しい飢餓にも負けず生きているが、競技や戦争に輝しい名誉を勝ち得て、市民や見知らぬ人から高い賞讃の辞を受ける。」<sup>(12)</sup>、「しかし一部始中、競技者は素晴らしい才能を持って生まれなければならない。力と美はゼウス、グレース<sup>(13)</sup>、ファース<sup>(14)</sup>、の贈り物で、それらは昔から名誉のある家系に授けられる。しかし、身体美は美的な行為とマッチしなければならない。従って、天賦の才能はそれらを発達させる義務を持ち卓越性は神の恵みを受け、犠牲と労苦によってのみ得ることができる。」<sup>(15)</sup>ここにピンダロスは競技に対して道徳的な威厳を与えている。なぜなら

犠牲と労苦は強制によって課せられるのではなく、名誉のためであるから。ピンダロスに於ては名誉に対する欲求さえも全く利己的でない。勝利は優勝者の故国にとっても、彼の家族にとっても、先祖にとっても喜びであり、名誉であった。更に彼らは真のスポーツマンとして「労苦と犠牲」を楽しんでいる。

戦車競走と競馬競走は当然、普通の競技種目より相当の負担になったが、民族的な競技会で技を競う人々にとってこれらの種目は金と時間の労費を意味していた。実際、競技はアエギナのラムポンのように一族の伝統となつて世襲されていたものがあったが、それをピンダロスは「競技者の中の砥石」として述べている。「練習が行為を完全にする」というヘシオドスの格言に従うように父親は息子にすすめ、練習のすべてを授けたが、概して専門トレーナーを招いて高い費用を支払っている。ピンダロスのひいきの客の中で最も人気のあった競技種目はボクシング、レスリング、パンクラチオンで、これらのスポーツは単に労苦というだけでなく、生命に別状なく支肢に危険であることを意味したが、「危険な行為には名誉が加わる」と詩人が語るように、その危険はスポーツに熱情を加えるというだけのものである。競技者に最も必要な資格は勇氣と忍耐力で、ヘラクレスはピンダロスにとって理想的な競技者であり、不撓不屈の精神を持った男である。

しかし、ピンダロスにとって競技者の最も顕著なる資格は訳し難い言葉、アイドース Aidos によって表わされている。それは神々の支持を受ける資格と、越権、誇り、無礼によって起るねたみを神々から買わないことを意味し、正確には無礼の反対語で神、同僚、自分自身に当然払うべき尊敬の感情であり、尊敬、謙遜、名誉の感情である。これらのことが競技者とあばれ者を区別している。力は人間をそそのかし、人間に悪用させる気を起させ、成功は「驕慢な態度」を生ぜしめる。しかし、アイドースは斗争に対して「心の勇氣と楽しみ」を注入する。ボクシングやレスリングほど高い水準の名誉を必要とするスポーツはなく、また破滅に陥入りやすいスポーツはない。しかし、アイドースはまともな戦士を作り出し、この性質を表わす形容詞としてピンダロスは横柄な態度を忌み嫌って真面目な道を進んだローデスのデアゴラスを述べている。それらはソフロシネ Sophrosyne、自己統制の典型的なギリシアの徳に似たもので、その包括力は我々にとって獸的に見えるスポーツであっても、人間にあらゆる楽しみと快よさ、賢、美と名誉となる勝利を如何にしてグレースの庇護の下に与え、また品位を添え、光栄を加えるかを理解させてくれる。

アイドースは非常に濫用される語、スポーツマンの本質となる名誉感を一般に多く備え、非常に深い感情があるけれど、敗者に対する騎士道的な稚量は恐らく近代スポ



ーツの所産であろう。ギリシア人は試合の後に互に手を握ぎるということはしなかったし、敗者が勝者に祝辞を送るということはまずなかった。敗けることは恥辱であり、醜として考えられた。従って、スパルタ人はボクシングやパンクラチオンに参加して敗けを認めることが不真面目であったから、スパルタ人はこれらの競技に出場することを市民に禁じたのであろう。彼らは争ってベストを尽すということは考えなかったし、敗けるよりはむしろ斗わない方が良いと考えていた。敗けた者は同僚から同情されず、戻って「不運に打ちつけられ、裏通りをこっそりと歩き、会ってもほほえみの一つさえ見せない。」<sup>(22)</sup>

ギリシアの理想はユニークなもので、再び同じようなものを生ぜしめる環境ではない。どれ程までその理想が実現され、どれ程まで長く続いたかと言えば、それは恐らくペルシア戦争に続く愛国心の波の下での数年間であらう。しかし、BC 5世紀中期頃にはプロフェッショナルリズムの台頭により、変化が生じ、競技は衰退の一途を歩んだ。しかしながら、理想は競技を一層良くするものとして存在し続け、それは再びA・D・2世紀にルキアノスの「アナカルシス」の中に述べられている。競技という語がプロを意味するようになった時代にかかれたクセノホンの「メモロビリア」からここに一例を挙げねばならない。ソクラテスは虚弱に育った青年に会い、身体が非常に貧弱な状態にあるので、運動をすすめるが、青年は「私はプロ競技者ではない」と答えて反駁している。このように哲学者達は最上に身体を発達させることを義務として講義しているが、彼の指摘するように市民は身体訓練の問題に素人的になってしまった。良い状態に自分自身を保ち、運動に関心を持って国家に奉仕することは市民として仕事の一部であった。戦争時に於ても危険時に於てもトレーニングをしない青年の国からは自己防衛本能が同様なものを要求している。身体が可能な美と力を全く帰りみることなく、年を取ることは不名誉なことである。自分の力と美を極度に発達させることは市民の義務で、これがギリシアの理想であった。(本学助手)

## 結 語

BC 6世紀以来、ギリシアの芸術家達は美の理想を競技者に追い求めたが、歴史的に見ると三期に区分することができる。BC 6世紀は競技の組織化された時代で、一般に全身が発達しているボクサーやレスラーのような強い者を描いた力の時代である。この時代を代表する像はクロス型のアポロンで、写實的に身体の筋肉が表現され、真に力のこもっているのは胴の筋肉である。BC 5世紀の前半は美的な発達と優雅さを備えた気品のある姿をとらえた競技美の時代で、BC 5世紀の後半は最高の美を求めて意識的に美の理想を築きあげた時代である。ミロンはこの時代を代表する偉

## ギリシア競技と芸術

大な彫刻家であり、ポリクレイトスは美の規範（カノン）を作り、今日よく使われる七頭身、八頭身の基礎理論を築きあげた人である。特にこの時代は美と力が結合されて頑丈な体つきをしているが、ヘレニズム時代の競技者像のように筋肉が不自然に隆起していない。その表現には落着きと威厳があり、アイドースと呼ばれる競技理想の基調をなし、競技と芸術は密接に結びついている。

## 脚注及び引用文献

1. Philostratos 「Gymnastikos」 43章  
メゾー「古代オリンピック競技の歴史」P 261, ミロはBC 540から512年まで7回オリンピック競技に参加して6回優勝し、ヒポステネスもBC 632年から608年の間に6回優勝している。ヒポステネスの息子ヘトモクレスはレスリングに5回優勝した(Pausanias III, 13, 9)
2. Pausanias 「Descriptio Graeciae」 VII 101~3 グラウコス は65回オリンピックアードの少年ボクシングの優勝者である。Philestratosによると彼は弓形の鋤の刃を真直ぐにした。(Gymnastics 20)
3. Pausanias 「Descriptio Graeciae」 VII 2~3
4. Quintilian 「Institutiones Oratoriae」 I, 9
5. Aelianus XII 22, 古代オリンピック競技の歴史 P 113~114
6. メゾー「古代オリンピック競技の歴史」P 166
7. N. E. Gardiner. 「Olympia」 P. 92
8. チサンドルスは第60~63回のオリンピックアードのボクシングに優勝している。
9. Philostratos 「Gymnastikos」 43章 メゾー「古代オリンピック競技の歴史」P 261
10. Athenaeus 「Deipnosophistae」 412F, 413B 更に彼は話を続けている。この恐しく力のあ  
る男は毎日20ミネ (Minen 8.68kg) の肉と同量のパンを食べ、その上3フス (chus 9.8ℓ)  
ブドウ酒を飲んだ。
11. 論叢3号「古代オリンピック競技の歴史」P. 9 参照するとよい。
12. Plinius 「Naturalis Historia」 IV 9.4 だれでも顔形を石に刻むことはできなかった。た  
だ賞賛すべき行為で永遠に残すに値するものだけが許され、聖なる競技、特にオリンピック競  
技では優勝した者が像を立てるのがならわしであったが、3回優勝した競技者には人相を刻  
んだ等身大の像をたてさせた。人々はこれをイコニア Iconica と呼んだ。
12. Pindaros 「Ithmian Ode」 I, 47
13. グレースとは美、魅力、喜びを与える Aglalia Euphrosyne, Thalia の三姉妹神をいう。
14. ファーテスとは運命をつかさどる Clotho, Lachesis, Atropos の三女神をいう。
15. Pindaros 「Ithmian Ode」 IV 57, V 10
16. Pindaros 「Ithmian Ode」 IV, V 及び, 「Nemean Ode」 V
17. Pindaros 「Olympic Ode」 VI, 9
18. Pindaros 「Olympic Ode」 I, 56
19. Pindaros 「Olympic Ode」 VII 44, X III 10
20. Pindaros 「Olympic Ode」 VII 15, 90 及び 「Nemean Ode」 IX 33
21. Pindaros 「Olympic Ode」 X IV, 5
22. Pausanias 「Descriptio Graeciae」 VIII 86
23. Xenophon 「Memorabilia」 III 12